

平成22年度第1回対馬暖流系アジ・サバ・イワシ長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2010年11月～2011年3月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は、11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み～やや高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」：約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」：約2年に1回程度の出現確率

漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年並み。
- (2) マサバは前年並み。
- (3) ゴマサバは前年並み。
- (4) マイワシは前年並み。
- (5) ウルメイワシは前年を下回る。
- (6) カタクチイワシは前年並み。

※「前年」は2009年11月～2010年3月。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 香川、今井

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所 業務推進部

電話：098-860-1600、ファックス：095-850-7767

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://snf.fra.affrc.go.jp/>

西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2010年11月～2011年3月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甌沖、薩南沿岸、黒潮域、沖縄島周辺海域、大陸棚上で「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過（2010年4月～9月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：4～6月「はなはだ低め」、7月「平年並み」、8月「かなり高め」、9月「はなはだ高め」。

南部：4月「はなはだ低め」、5月「かなり低め」、6月「はなはだ低め」、7月「平年並み」、8・9月「はなはだ高め」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

沖縄北西方の黒潮の流路は、夏季は「平年並み」で経過。

流量は、春季は「平年並み」、夏季は「やや少なめ」で経過。

薩南海域における黒潮北縁域は、4・9月は「接岸傾向」、他の月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」で経過。

(2) 海面水温

4・5月「平年並み」、6月「やや低め」、7月「やや高め」、8・9月「はなはだ高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：4月「平年並み」、5月「やや高め」、6月「やや低め」、7月「やや高め」、8月「平年並み」、9月「やや高め」。

山口県沿岸：4・5月「やや高め」、6月「やや低め」、7月「平年並み」、8・9月「やや高め」。

対馬東水道：4・5月「平年並み」、6月「やや低め」、7月「平年並み」、8月「やや高め」、9月「やや高め」。

壱岐水道：4月「平年並み」、6月「やや低め」、8月「やや高め」。

五島西沖：4月「平年並み」、6月「かなり低め」、8月「やや高め」。

五島灘：4・6月「平年並み」、8月「やや高め」。

天草西沖：4月「やや低め」、5・8月「やや高め」。

西薩・甌沖：4月「やや低め」、5・8月「やや高め」。

薩南沿岸：4月「やや低め」、5・8月「やや高め」。

薩南沖合 : 4月「平年並み」、5月「やや低め」、8月「やや高め」。
沖繩島南東 : 4月「かなり高め」、5・6月「やや高め」、7月「かなり高め」、
8月「やや高め」、9月「かなり低め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合 : 4月「やや低め」、5~8月「平年並み」、9月「やや低め」。
山口県沿岸 : 4月「かなり低め」、5~7月「平年並み」、8月「やや低め」、9月「平年並み」。
対馬東水道 : 4月「かなり低め」、5月「はなはだ低め」、6月「平年並み」、
7・8月「やや低め」、9月「平年並み」。
壱岐水道 : 4月「やや低め」、6月「平年並み」、8月「やや低め」。
五島西沖 : 4月「かなり低め」、6月「平年並み」、8月「やや低め」。
五島灘 : 4・6・8月「平年並み」。
天草西沖 : 4月「平年並み」、5・8月「やや高め」。
西薩・甕沖 : 4月「平年並み」、5・8月「やや高め」。
薩南沿岸 : 4月「やや低め」、5・8月「やや高め」。
薩南沖合 : 4・5月「平年並み」、8月「やや高め」。
沖繩島南東 : 4月「平年並み」、5月「やや高め」、6月「平年並み」、7~9月「やや高め」。

3. 現況 (2010年10月上旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部、南部ともに「かなり高め」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「離岸傾向」。海面水温は「かなり高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「かなり高め」。

(註) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の出現確率

「かなり」 : 約7年に1回程度の出現確率

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域あじ・さば・いわし長期漁況予報

今後の見通し（2010年11月～2011年3月）

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2010年級群（2010年生まれ））、1歳魚（2009年級群）、2歳魚（2008年級群）。

魚の大きさは、あじ・さばは尾叉長、いわしは被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(3) 魚体：10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年を上回り平年並み。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および29～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年を上回り平年並み。

(3) 魚体：25～30cmの0歳魚（豆・小銘柄）および29～33cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。1月以降には、沿岸域で33～40cmの2歳魚以上（中銘柄）が主に漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量：前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：沿岸域で散発的に漁獲される。

(3) 魚体：15～19cmの0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量：前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：漁期後半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～20cmの0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量：前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：漁期後半が主体で、漁場は沿岸域が中心となる。

(3) 魚体：10cm以上の0・1歳魚（大羽銘柄）が主に、5cm程度の0歳魚（小羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2009年11月～2010年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過(2010年4月～8月)および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980～1990年代前半に増加し、1993～1998年には近年では高い水準を維持した。1998～2000年の加入量減少のため、資源は減少傾向を示したが、2001～2004年の加入量は1994～1997年と同程度の高い水準で経過し、2004年にかけて資源量は増加した。2005年以降の加入量水準は近年では低い水準となり、資源量も減少したが、2008・2009年の加入量は増加したとみられ、資源量もやや増加した。

東シナ海・日本海(青森県～鹿児島県)での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980～1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年は13万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2005～2007年は減少した。2008年以降はやや増加し、2009年は約14万トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・80年代は比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年に急減した。1998～2000年にかけてさらに減少し、2000～2007年は低い水準で横ばい傾向を示していた。2008年の高い加入量のため、資源量は2008年に急激に増加し、中位水準まで回復したと考えられる。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半には27万～30万トンであったが、その後減少し、1990～1992年は13万～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降、漁獲量は増加傾向を示し、1996年に41万トンに達したが、1997年は21万トンに大きく減少した。その後もさらに減少し、2000～2006年は90千トン前後で推移していたが、2007年は106千トン、2008年は121千トン、2009年は131千トンと緩やかな増加傾向を示している。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992～2009年に比較的安定して同程度の水準を保っている。近年では、2004年級群の高い加入量のため、資源量は2005年に高い値を示したが、その後は減少傾向を示している。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移している。1999年に近年で最高の88千トンが漁獲された後、減少傾向を示し、2004年は31千トンであった。2005年は76千トンに増加したが、その後は再び減少傾向を示し、2009年は36千トンであった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、その後1980年代にかけて高い水準にあったが、1990年代に急激に減少し、2001～2003年には過去最低水準となった。2004年以降は極めて低い水準ながらも増加傾向にある。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年から1991年までは100万トン以上と多かったが、その後、急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年以降は増加傾向にあり、2007年の漁獲量は14千トンと近年では最も多かった。2009年の漁獲量は8千トンであった。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するウルメイワシの資源量は、1970年代後半と1980年代後半に多く、1980年代前半および1990年代後半には少なかった。近年では、1990年代後半から2000年まで資源量は漸減傾向にあり、2001～2007年までは資源量がやや増加し、2008年は再び減少したものの2009年は増加した。

東シナ海・日本海での我が国のウルメイワシの漁獲量は、1981年から1989年にかけて徐々に増加し、1989～1993年は4万トン前後で推移したものの、その後減少した。2000年に13千トンとなった後は増加に転じ、2009年の漁獲量は22千トンであった。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1970年代から1980年代後半までは低く、1980年代後半から増加し始めた。1997～1999年の資源量水準は推定されている期間の中で高位であった。しかしながら資源量は2000年から2004年まで一旦減少した後、2007年にかけて増加したものの、2008・2009年は減少傾向にある。

東シナ海・日本海での我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1982年に73千トンとなった後1990年まで減少した。その後、漁獲量は徐々に増加し、1998～2000年に12万トン以上となった。2001・2002年は漁獲量が一旦下がったものの、その後は再び増加し、2008年には97千トンとなったが2009年は減少した。

2. 漁況の経過

2010年4月～8月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖、五島西、東シナ海中部および東シナ海南部が中心であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計3万8千トンで前年(2009年4月～8月、4万5千トン)並みであった。マアジは2万4千トンで前年(2万1千トン)並みで、さば類は6千トンで前年(1万7千トン)を下回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、福岡県・長崎県では前年を上回り、その他の海域では前年並み～下回り、全体としては前年・平年並みだった。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚と15cm以下の0歳魚であった。マサバは、海域によって差があるが、概ね前年を上回り、平年並みであった。漁獲の主体は26cm以下の0歳魚であった。ゴマサバは、前年並みで、平年を下回った。4月は33～38cmの3歳魚、5月は3歳魚および24cm以下の0歳魚、6月は26cm以下の0歳魚、7・8月は30cm以下の0・1歳魚が主に漁獲された。マイワシは、前年並みで平年を下回った。漁獲の主体は期間の前半には15～20cmの1・2歳魚、後半には15cm以下の0歳魚であった。ウルメイワシは、前年・平年並みであった。漁獲の主体は4・5月が17～25cmの1・2歳魚であった。6月～8月は5～17cmの0歳魚主体に20cm以上の1・2歳魚がみられた。カタクチイワシは、前年並みで、平年を下回った。漁獲の主体は4・5月が8～12cmの1歳魚であり、6月～8月は2～7cmの0歳魚と10cm以上の1・2歳魚であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体で、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2009年級群は2008年級群を上回る豊度と考えられる。2010年級群については、2010年4月に行われた稚魚分布調査では東シナ海中北部で採集された稚魚の分布密度は前年並みであった。6月に東シナ海～山陰沿岸域で行った幼稚魚分布調査では前年を上回ったものの、5・6月に東シナ海陸棚縁辺域で行われた着底トロールの調査結果では、2010年級群は2009年級群を下回る豊度と考えられた。これらから、0歳魚(2010年級群)は前年と同程度か下回り、1歳魚(2009年級群)は前年を上回り、2歳魚(2008年級群)は

前年並みで、全体の来遊量は前年並みと見積もられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網の CPUE (1 日 1 隻当たり漁獲量) (参考図参照) は、2005 年から 2008 年にかけて減少したが、2009 年は上向いた。一方、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は 2007 年以降、ゆるやかに減少している (参考図参照)。来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並みと考えられる。

(2) マサバ

例年、11 月～3 月期には 0 歳魚 (豆銘柄) と 1 歳魚 (小銘柄) が漁獲の主体となる。2008 年級群の豊度は 2007 年級群より高く、2009 年級群の豊度は 2008 年級群より低いとみられる。2010 年級群の評価は難しいが、漁況の経過から 2009 年級群と同程度の豊度とみられる。これらから、0 歳魚 (2010 年級群) は前年並み、1 歳魚 (2009 年級群) は前年を下回り、2 歳魚 (2008 年級群) は前年を上回り、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は、直近までの漁獲状況から判断して、前年を上回り平年並みと考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、11 月～3 月期には 0 歳魚 (豆・小銘柄) と 1 歳魚 (小銘柄) が漁獲の主体となる。沿岸域では 1～3 月期には 2 歳魚以上 (中銘柄) が漁獲の主体となる。2008 年級群の豊度は 2007 年級群と同程度、2009 年級群の豊度は 2008 年級群と同程度とみられる。2010 年級群の評価は難しいが、漁況の経過から 2009 年級群と同程度の豊度とみられる。これらから、0 歳魚 (2010 年級群) は前年並み、1 歳魚 (2009 年級群) は前年並み、2 歳魚 (2008 年級群) は前年並みで、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は、直近までの漁獲状況から判断して、前年を上回り平年並みと考えられる。

(4) マイワシ

例年、11 月～3 月期には 0・1 歳魚 (中羽・大羽銘柄) が主に漁獲される。近年、日本海・東シナ海に生息するマイワシの資源量は全体としてはゆるやかながら増加傾向にあると考えられるが、山口県～鹿児島県の沿岸域では散発的な漁況が続いている。4 月～8 月期の漁況は低調であった前年並みであり、今後も同様の傾向が続くと考えられ、来遊量は前年並みで平年を下回ると考えられる。

(5) ウルメイワシ

例年、11 月～3 月期には 0・1 歳魚 (中羽・大羽銘柄) が漁獲の主体となる。各県の 4 月～8 月の漁況からみると 2010 年級群の豊度は 2009 年級群を下回り、2008 年級群と同程度か下回ると考えられる。4 月～8 月の漁況から判断して、11 月～3 月の漁況は好調だった前年を下回ると考えられる。全体として来遊量は、前年・平年を下回ると考えられる。

(6) カタクチイワシ

例年、11 月～3 月期には 0 歳魚秋季発生群 (小羽銘柄) と、0 歳魚春季発生群 (大羽銘柄) および 1 歳魚 (大羽銘柄) が漁獲の主体となる。春季発生群でみると 2010 年級群の豊度は 2009 年級群を上回り、2008 年級群並みと考えられる。秋季発生群の 2010 年級群の豊度を予測するのは困難であるが、2009 年級群と同程度と考えるのが妥当であろう。全体として来遊量は前年並みで平年を下回ると考えられる。

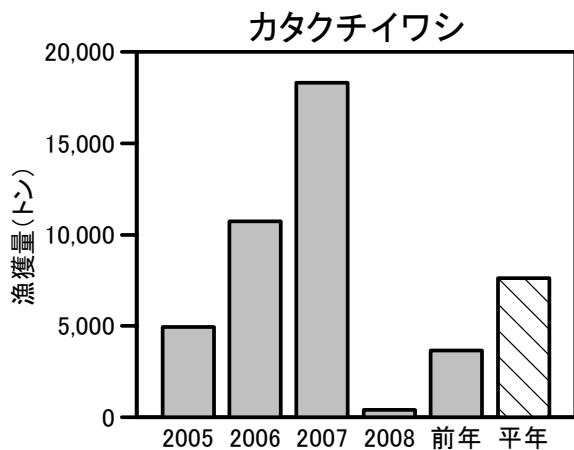
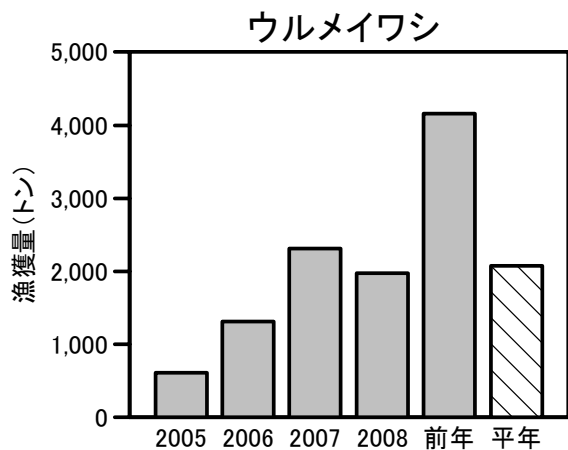
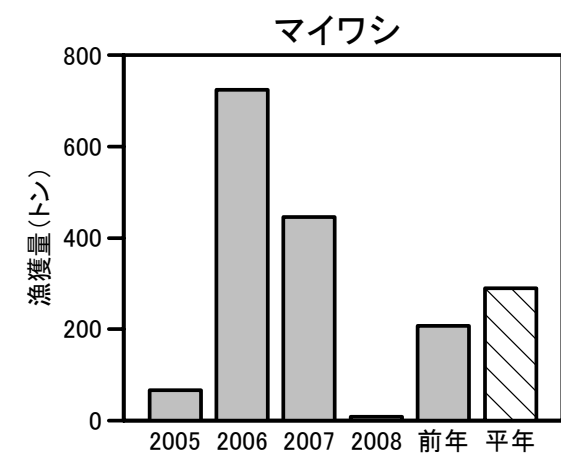
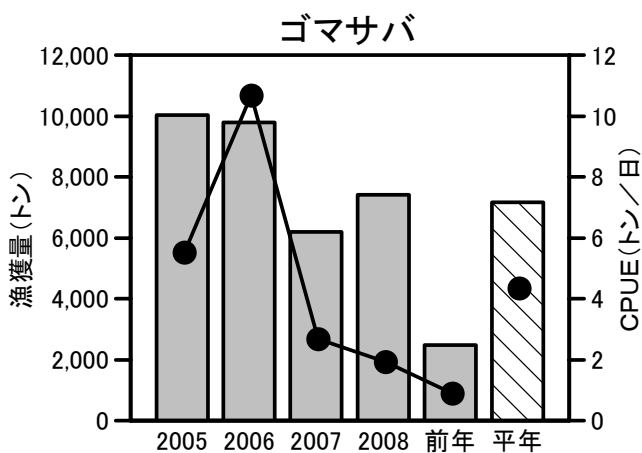
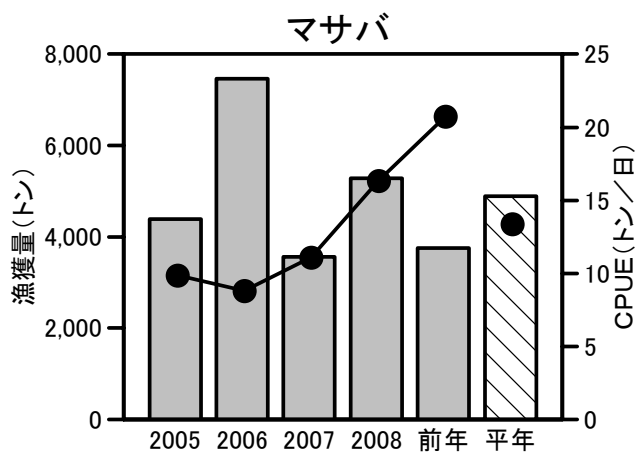
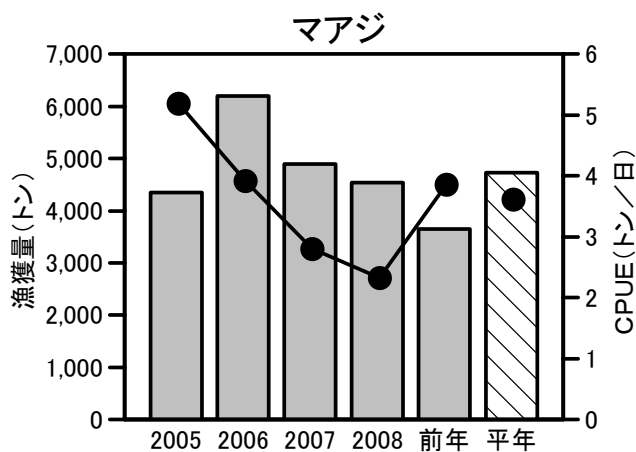
表 1. 沿岸域の漁況経過 (2010 年 4 月～8 月)

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	中型まき網の水揚量は、4 月～6 月にかけてほぼ前年・平年並みで推移し、7 月には前年・平年を上回ったが、8 月は前年・平年を下回った。	中型まき網の水揚量は、4 月はギリサバ(全長 25cm 以下)が多獲された前年を下回ったが、5 月～7 月は前年並みで平年を上回って推移した。8 月の水揚量は前年・平年を下回った。	
福岡	代表港まき網水揚量は 859 トンで不漁であった前年比 179%、平年比 130%とやや持ち直した。0 歳魚銘柄 135%、1 歳魚銘柄 236%と加入は好調。棒受網の水揚量は 9 トンで前年比 16%、平年比 11%と不漁。	代表港まき網水揚量は 167 トン、前年比 110%、平年比 71%とやや不漁。当歳魚銘柄が中心。棒受網ではほとんど水揚げされなかった。	代表港まき網水揚量は 2 トンで、不漁であった前年比では 554%であったが、平年比 3%と不漁。
佐賀	前年同期、平年同期を下回った(前年比 67%、平年比 67%)。	前年同期、平年同期を大幅に下回った(前年比 32%、平年比 6%)。	
長崎	地域により差があるが、概ね前年を上回り、平年並みであった(前年比 130%、平年比 109%)。	地域により差があるが、概ね前年を上回り、平年並みであった(前年比 139%、平年比 114%)。	
熊本 牛深港	水揚量は 98 トンで前年比 73%(134 トン)、平年比 87%(112 トン)であった。	水揚量は 697 トンで前年比 6498%(11 トン)、平年比 182%(382 トン)であった。	
鹿児島	主要 4 港のまき網で、4 月～6 月は豆、小アジ(2009 年級群)主体、7・8 月はアジ仔(2010 年級群)、小アジ(2009 年級群)、中アジ(2008 年級群以上)主体の漁獲があった。4 月は好調な漁模様であったが、7 月以降はアジ仔(2010 年級群)の加入が非常に悪く低調に推移した。期間中合計で 1046 トンの水揚げで、前年(1469 トン)を下回り・平年(1245 トン)並みであった(前年比 71%、平年比 84%)。		主要 4 港のまき網では、4 月はゴマサバ中(2007 年級群以上)主体、5 月はゴマサバ中(2007 年級群以上)、ゴマサバ豆(2010 年級群)主体、6 月はゴマサバ豆(2010 年級群)主体、7・8 月はゴマサバ豆(2010 年級群、2009 年級群)主体であった。期間中合計で 5746 トンの水揚げで、前年(5904 トン)並みで平年(8093 トン)を下回った(前年比 93%、平年比 71%)。

表 1. 続き

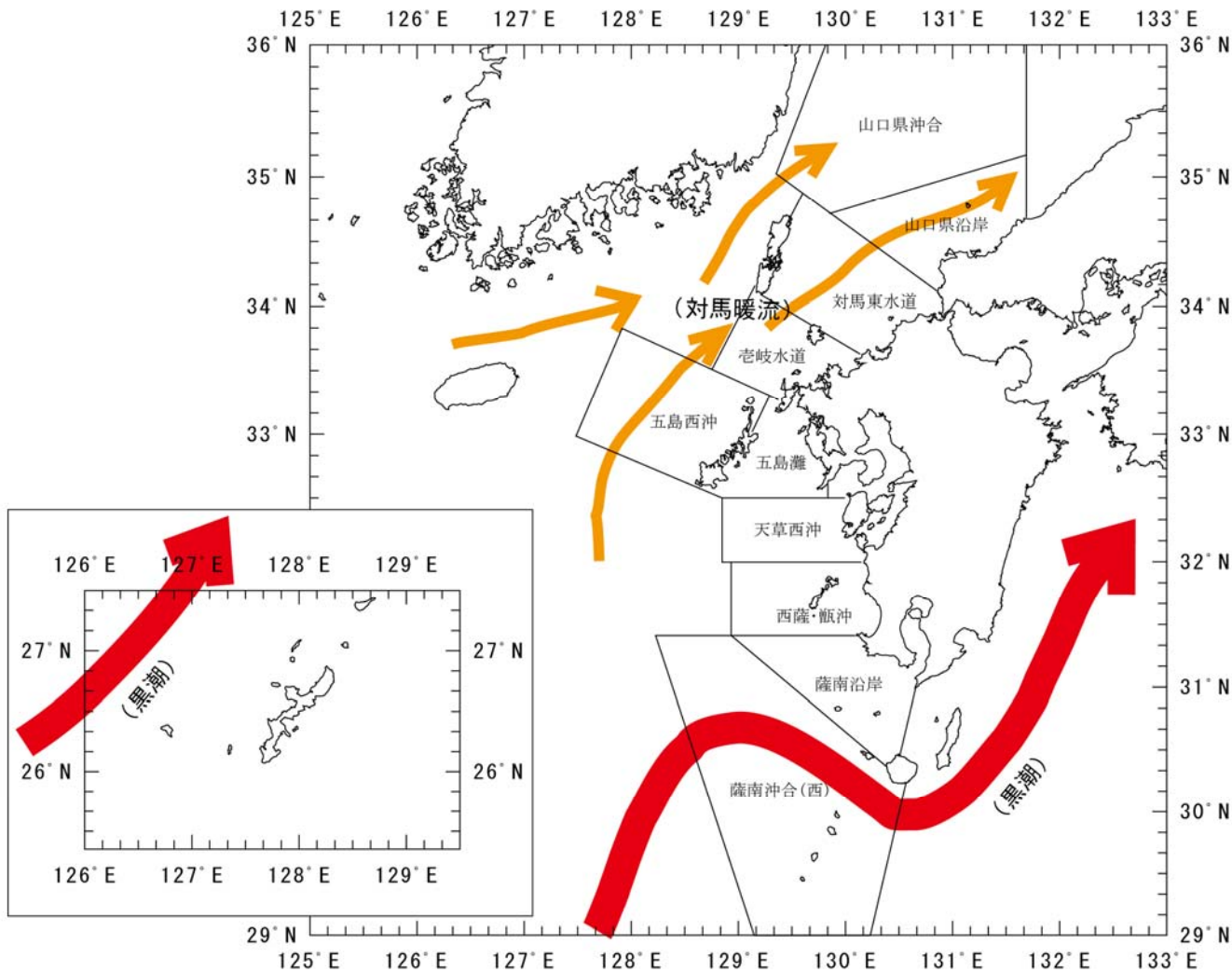
	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	期間中の中型まき網の水揚量は2トンで前年比18%であった。湊地区の浮敷網では、当歳魚のヒラゴ(10cm以下)で0.2トンの水揚げがあった。	湊地区の浮敷網では、昨年5・6月にまとまって水揚げされた当歳魚のウルメ仔(10cm以下)は水揚げされず、8月になって小・中羽が202トン水揚げされた。これにより期間中の水揚量は202トンで前年比144%、前年比181%であった。	期間中の湊地区の浮敷網の水揚量は、小・中羽を主体に1193トンで前年比166%、前年比81%であった。
福岡	代表港まき網水揚量は23トンで前年比185%、前年比30%と不漁。棒受網、小型定置網では水揚げされなかった。	代表港まき網水揚量は69トンで前年比103%、前年比39%と不漁。棒受網では水揚げされなかった。	棒受網の水揚量は74トンで前年比352%、前年比81%と、前年並みであった。
佐賀	前年同期、前年同期を大幅に下回った(前年比53%)。	前年同期、前年同期を大きく下回った(前年比9%、前年比3%)。	前年同期を上回り、前年同期を下回った(前年比389%、前年比74%)。
長崎	前年を大きく上回り、前年を下回った(前年比3972%、前年比78%)。	前年・前年を下回った(前年比32%、前年比52%)。	地域により差があるが、概ね前年並みで、前年を下回った(前年比97%、前年比65%)。
熊本 牛深港	水揚量は13トンで前年比262%(5トン)、前年比20%(64トン)であった。	水揚量は717トンで前年比258%(278トン)、前年比228%(314トン)であった。	水揚量は1636トンで前年比114%(1433トン)、前年比118%(1382トン)であった。
鹿児島	ウルメイワシに混獲されるのみで、まとまった来遊は無かった。主要4港のまき網で、5トンの水揚げで、前年(27トン)、前年(380トン)を下回った(前年比19%、前年比1.4%)。北薩海域の棒受網では、7月から小羽がウルメイワシに混獲され62トンの水揚げで、前年(5トン)、前年(16トン)を大きく上回った(前年比1244%、前年比403%)。	主要4港のまき網で、4月～6月は薩南海域に大羽主体の漁場が形成され好調に推移した。7・8月は前年・前年を下回った。期間中合計で1020トンの水揚げで、前年(897トン)・前年(1058トン)並みであった(前年比114%、前年比96%)。北薩海域の棒受網でも6月から小・中羽主体に好調な来遊となった。期間中合計で844トンの水揚げで、好調であった前年(1280トン)は下回ったが、前年(671トン)を上回った(前年比66%、前年比126%)。	主要4港のまき網で1219トン(前年比268%、前年比174%)と前年・前年を上回り、北薩海域の棒受網では464トン(前年比108%、前年比118%)と、前年・前年並みであった。

注：「前年」は2009年4月～8月、「前年」は過去5年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量(沿岸漁況の指標の一つ; 棒グラフ)と大中型まき網の1日当たりの漁獲量(沖合漁況の指標の一つ; 折れ線グラフ、CPUE)。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県(ゴマサバを含むが主にマサバ)、ゴマサバは鹿児島県(マサバを含むが主にゴマサバ)、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。



参 画 機 関

山口県水産研究センター	沖縄県水産海洋研究センター
福岡県水産海洋技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
長崎県総合水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター
熊本県水産研究センター	西海区水産研究所
鹿児島県水産技術開発センター	